

# 穂いもち病発生倍増 23年はさらにあぶない

いもち病を発生させないために総合的な予防対策と防除が必須

- 平成22年の穂いもち病発生面積は全道作付け面積の半分近い5万<sup>㊦</sup>強に至っており、いもち病菌密度が極めて高くなってきています。
- このことから、23年産米のいもち病予防の徹底に向けて、種子消毒を始め、総合的な予防対策と防除を徹底する必要があります。
- また、22年産は、いもち病が全道広範囲に発生し、さらに登熟後半まで発病が続いたため、採種圃産種子であっても「いもち病の保菌」が懸念されます。
- さらに、菌密度が高かったことから、通常の種子消毒では防除できない玄米感染している種籾もあるものと予想されます。

総合防除法

第一段階 種子消毒  
第二段階 育苗箱施用

第三段階 水面施用  
第四段階 基幹防除

第二段階以降は、別途随時発行します

## 第一段階 種子消毒を徹底しよう

保菌籾

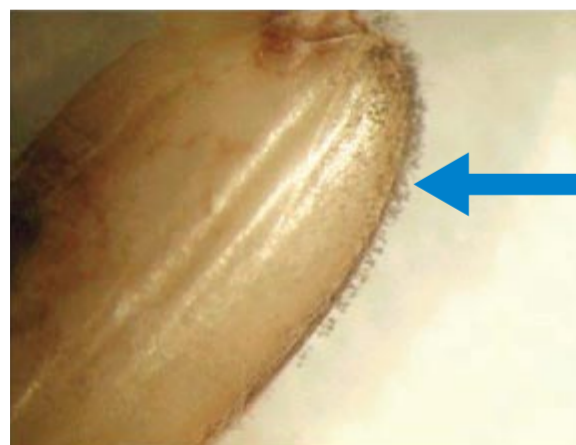


増殖したいもち病菌胞子

保菌籾のいもち病菌は、護穎や枝梗で菌糸の状態で潜伏。

通常の種子消毒で防除できる

玄米感染



玄米に感染したいもち病菌は、通常の種子消毒で防除できない

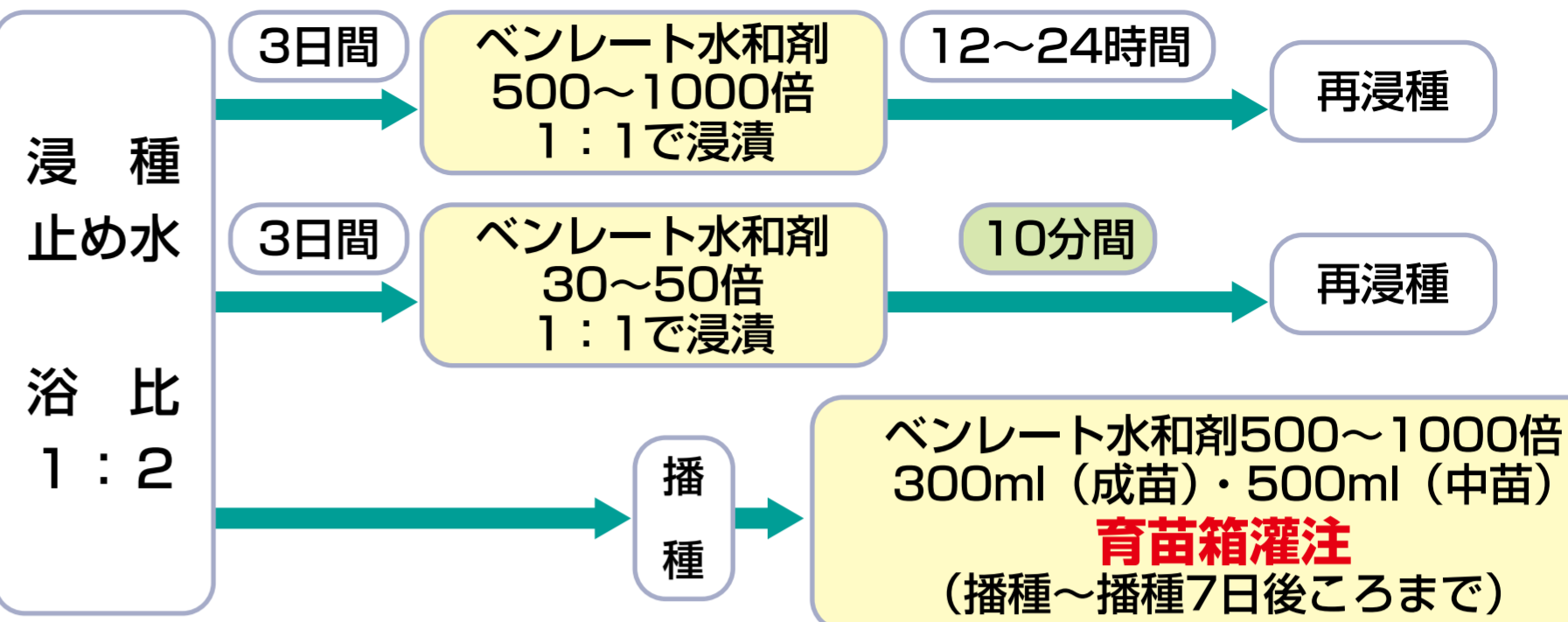
ベノミル(例:ベンレート)水和剤が有効

今年の種籾消毒には通常の種子消毒に加えてベノミル(例:ベンレート)水和剤を使って「いもち病」を防除しましょう

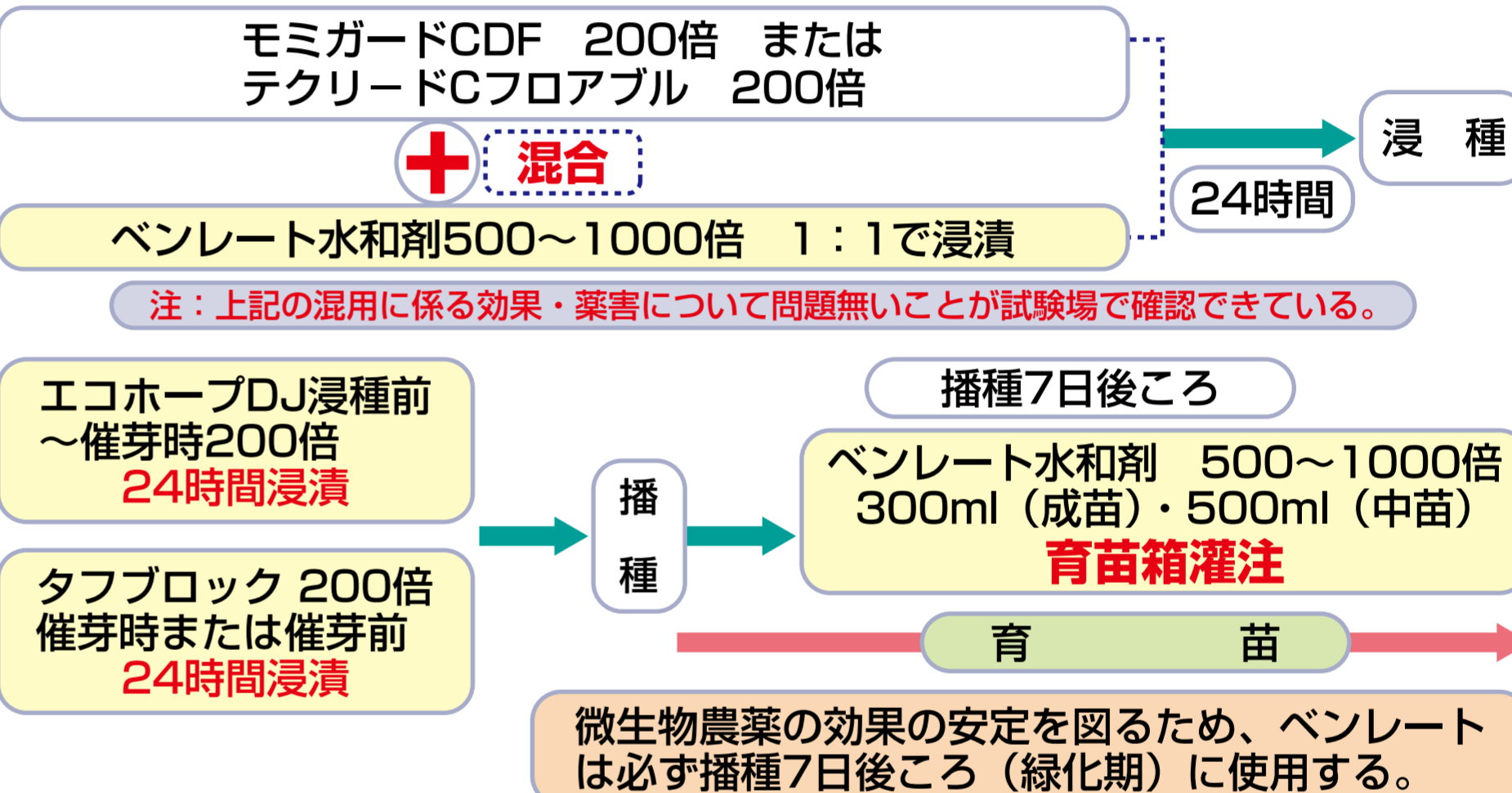
種子消毒の使用残液は、河川や地下水など環境の影響がないよう適切に処理する

## 本年の種子消毒の具体的方法(例)

消毒済み種子



未消毒種子



温湯消毒種子

